湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 看護学科

名 前 牛田 貴子

作成日 2023年9月30日

#### 1. 教育の責任

本学開学(2015)年度より勤務している。現在まで保健医療学部看護学科の老年看護学領域教授(2023年度より基盤共通看護領域教授)、2019年度の大学院開学より現在まで大学院保健医療学研究科保健医療学専攻の健康増進・予防領域の教授、2017年5月から認定看護師研修センター準備室教員を経て、2018年度から現在(2019年度看護実践研修センター認定看護師部門認定看護師教育課程(認知症看護分野)、2021年度看護キャリア開発コアセンター認定看護師部門認定看護師教育課程(認知症看護分野)に名称変更、2023年度は休講中)まで主任教員として、それぞれ教育にあたっている。

## 1) 学部学科教育

老年看護学領域の7科目(必修6科目8単位、選択1科目1単位)を構造化し、全ての科目の科目責任者を担った。年度により「看護基礎ゼミ(必修)」「家族看護学(必修)」「統合実習(必修)」等の科目責任者を担った。開学時の看護学科学生支援委員、看護学科実習委員会の取りまとめ役をはじめ各委員会を担当した。2015~現在まで2チューター(2018年度の学年チューター制~2022年度は学年チューター長)として直接学生の指導を行った。2019年度カリキュラム、2022年度カリキュラムの案作成に委員として携わった。また自己点検・評価書及び大学機関別認証評価では、FD活動、学生支援活動を担当した。また、ボランティアサークルの顧問として、5年間学生活動を支援した。

## 2) 大学院教育

特別研究の指導教員として3名の院生の指導を担当した。うち1名修了、1名在学中、1名は退学である。また副指導教員として助産学の院生2名の指導を担当した。科目責任者として共通科目では「家族ケア特論(選択)」、専門科目として「生活支援医療学特論 I (選択)」「生活支援医療学特論 III (選択)」「生活支援医療学演習 I (選択)」を担当した。「生活支援医療学演習 I 」で実施した質的分析演習の成果を3年続けて看護系全国学会で発表した。自己点検・評価書作成では、教養教育の実施、学習成果の点検・評価等を担当した。

# 3) 認定看護師教育

1~5 期生まで約 80 名の修了生を輩出し、終了後に認定試験を受験した者は全員合格している。主任教員として課程の運営の全般に携わった。「医療安全:医療倫理」「認知症に関わる保健・医療・福祉制度」「認知症者への支援・家族関係調整」など(すべて必修)の講義科目 6 科目の科目責任者または担当者として教育を実施した。また専任教員と分担して演習、ケーススタディ、臨地実習の指導にあたるとともに、学習継続のための相談・指導等にあたった。全国学会でケーススタディを研究にまとめなおしたものを 1 本発表した。

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

看護学を教授するにあたっての私の強みは、保健師、助産師、看護師としての幅広い臨床経験があること、また一般企業勤務の経験があることである。教育経験は看護師2年課程(いわゆる進学課程)専門学校、看護師3年課程専門学校、短期大学、大学、大学院と、看護教育の変遷とともにあり、担当領域も基礎看護学、成人看護学(慢性期・回復期)、老年看護学、母性看護学、小児看護学、地域看護学と多岐にわたっている。職域や領域を超えて多角的に教育内容を見渡すことができるため、看護の専門分野に共通するベースとなる部分の4年間の学びのつながりを意識して、自分が担当する教科目の位置を意図的に学生に伝えている。たとえば、研究領域である家族看護や施設看護は専門分化の先端にあるように見えるが、人の理解や看護活動の場(環境)の理解という意味では、看護の基盤となる部分である。だからこそ、2019年度カリキュラムでは1年後期に家族看護学、2年前期に高齢者ケア施設での臨地実習を組み入れ、自らの家族と生活の場を振り返り、領域を超えてその後に発展的に学修できるようなヒントやつながりを意図的に組み入れた。

大学生の4年間は、人生の中で大変貴重な時間である。自ら進む職業を決めて努力するだけでなく、さまざまな人や学問と出会い、人として豊かに変化していく途上にある。コロナ禍で様々な制限はあったが。、看護学科の学生としてだけでなく、学内・学外での人との交流の機会を大切に過ごしてほしいと考えている。

#### 2) 理念をもつに至った背景

自らの看護学生時代の充実感、満足感が大きく影響している。介護保険法も老人保健 法ない時代であったが、看護学校が医師会の協力を得て訪問看護を継続的に実施して おり、臨地実習には 3 週間の訪問看護実習を履修するという先駆的な教育であった。小 さい学校ではあったが、サークル活動、自治会活動、学校祭やスポーツ大会などの学校 行事がたいへん活発で、主体的に協力して創り上げること、問題解決を組織的にすること を、授業や課外活動で学んだ。教員は支援者や脇役として学生の意志決定や行動を尊 重して待ち、時には盾となる姿を学生に見える形で示してくれていた(ことが教員になって からわかった)。

私は職域や専門領域を転々と変わっているが、これも自らのその時々の状況とその後について検討し、最善を選択していった結果である。所属組織の都合もあったが、さまざまな体験は統合され、意味ある形で今につながっている。現在、老年看護学と家族看護学を教授しているが、看護学生時代に希望していたところに戻ってきたという実感がある。卒業生が自律し、広い意味で自己研鑽を積み、「自ら望む看護職となる」ことを支援したいと考える。

## 3. 教育の方法・戦略

1) 老年看護学関連科目の学習内容の構造と教材の工夫

2019 年度カリキュラム案作成から、関連科目(講義・演習 5 科目 5 単位、実習 2 科目 4 単位)のシラバス作成、授業準備、実施、評価までの一連に携わった。特に重点を置いたのは、①他領域の履修済みの科目、並走して履修する科目、後続する科目との内容の連続や関係性を明確にして学生に伝える工夫、②老年関連科目の中での学修の積み重ねを学生が実感できる工夫である。

①に関しては、基礎看護学で学んだ人間や看護の理解と老年看護学での学びのつながり、老年看護学実習と成人看護学実習との相違点と共通点、老年看護学実習 I・Ⅱ (施設・病院)と在宅看護学実習や地域看護学実習との学びのつながり等である。老年看護学関連科目ではないが、一部の学生を担当した統合実習では看護管理的要素も含みつつ、個々の学生が体験してきた全ての臨地実習の学修をつなぎ、看護の専門性や役割を再検討する機会となるように、学生が過去に作成した記録物の活用や、対話やグループワークで体験を引き出すような企画や指導をした。

②に関しては、老年看護学概論で毎回提出した小レポートの返却、老年看護技術演習ノート、老年看護過程演習ノート等がある。いずれも学生が授業において作成した評価対象物であるとともに、臨地実習でそのまま活用する有用な自作資料となる。講義(概論・方法論 I )→実習 I (施設系)→講義(方法論 II・方法論 III)→実習 II (病院)→講義(認知症看護論(選択))という流れで、講義と実習が入れ子形式に学修が進む。そのため、学んだこと・考えたことや疑問の自記が学生の手元に継続して残り、高齢者の理解、看護技術の提供、看護過程の展開等、老年看護学の履修の深化に必要な内容が順に揃っていくようにした。コロナ禍において対面授業からオンデマンド授業に変更せざるを得ない状況は、授業内容の精選とシステム化をさらに進化させた。その時々に説明を追加しなくてもわかりやすく、且つリアルな実感が得られる教材を意図して作成した。

## 2) 家族看護学の学習内容の構造と教材の工夫

2019 年カリキュラムの新設科目だが、2022 年カリキュラムで廃止となり、3 年間だけ教科目として存在した。多様な家族背景をもつ学生が存在し、自己肯定感が低いといわれる昨今の大学生の課題に対して、学問的側面から理解を深めるために 1 年次後期に配置した。講義は教科書の順ではなく、初回講義は「現代家族の多様性と看護の姿勢」で、家族に関わる医療者の倫理を考えさせる DVD 教材を用い、学生の学問的関心を得た。また、学生の個人情報に触れないよう配慮する演習やグループワーク、自らの家族の発達課題やライフサイクルや家族史も振り返る機会となる説明などを取り入れ、これまで臨床看護師の継続教育に用いた資料や事例を一年生にもわかりやすい用にアレンジして使用した。

尚、本学の家族看護学はなくなったが、2023 年度からは同様の内容で、茅ヶ崎専門学

校で講義を実施している。

## 4. 学習成果

教師学をベースとした老年看護学教育の実践研究の取り組みとして、開学前の 2014 年 11 月から神奈川県内で「高齢者ケアの教師塾」を開始して 9 年目となった。代表世話人として準備期から関わっている。コロナ禍で休止した期間を除き、月 1 回の開催を継続し、2024 年 4 月に 100 回目を迎える予定である。大学院生、臨床家、教員等の教育力向上と研鑽を目的にしており、本学の大学院生、教員、実習指導者等の参加も多い。参加者は延べ人数で約 500 名となる。また「高齢者ケアの教師塾」の発展として、看護系の全国学会で毎年交流集会を企画実施している。この実際と成果に関しては、2022 年度のふれあいグループの医療教育研究会で発表した。

本学の授業改善の取り組みの成果の一例として、老年看護学実習 I の学生による授業評価の変遷を示す。介護老人保健施設、介護老人福祉施設、有料老人ホームでの臨地実習は、カリキュラムの変更により 3 年次 1 週間から 2 年次 2 週間へと学習方法は変更したが、1 期生から 7 期生までの企画、実施、評価を継続して担当した。実習に関する総合的な満足について肯定的な学生の割合は、1 期生:91.8%で、教員の移動が多かった 3 期生:86.2%と下降したが、その後は年々上昇し、7 期生:98.5%と最高値となった。

#### 5. 改善のための努力

### 1) 2022 年度カリキュラムにおける授業方略の工夫

これまで担当してきた老年看護関連の科目や家族看護学は、2022 年度カリキュラムでは形を変えて存在し、授業科目としては担当しない。カリキュラム構造の全体の中のどの部分をどのように教授することになるのか、講義のねらいに適合した授業方略の工夫が必要である。

## 2) 再試験受験者をださない教育方法の検討

2022 年度までは、学修内容の定着のために、採点後に全員に試験を返却して解答説明の講義を行っていた。特に成績低迷者は自らの学修姿勢と方法を振り返るとともに、学修ポイントを確認・理解した上で再試験に臨めるように指導していた。この方法により再試験の不合格者をなくし、定期試験合格者にとっても学修内容の再確認となっていた。今後は、再試験受験者を出さない学生指導に変更する。これまでの小テスト、小レポート、定期試験等を組み合わせた評価方法について再検討するとともに、後続科目での学修成果も包含した統合的評価の捉え方への転換を検討したい。

## 6. 今後の目標

1) 2019 年度カリキュラムにおける学部学科教育

引き続き当該学生が卒業する 2024 年度末まで、老年看護学関連科目での学修を支援 しつつ、4 年間の学修の積み重ねを学生の実感として引き出せるように指導を行う。また 過年度生も満足がいく学修体験となるように、相談支援を行う。

# 2) 2022 年度カリキュラムにおける学部学科教育

2025 年度末に同カリキュラムによる最初の卒業生を輩出する。現時点で自らがどのような科目にどう関わるのか不明な点が多いが、このカリキュラムがつくられた背景や目的を節目節目で確認し、これまでの教員経験の生かし方を考えて、新たな教材作成や教育方略を実施する。また、コロナ禍による人との関りの経験不足や価値観をもつ学生達とのかかわり方を、学生やチューター教員等と協働しつつ模索する。またコロナ禍前の状況まで課外活動が盛んになるように支援する。

# 3) 大学院教育

現在在学している院生が予定している 2024 年度末に修了でき、研究者として第一歩が踏み出せるように支援する。